



こここのところかつての日本の高度成長期オヤジのように「めし・風呂・寝る」の世界で世間と縁遠く暮らしていた吾輩は7月21日の夕刊を見て超驚きました！ニャ、ニャンと先輩方が原宿に集結していませんか！「ご挨拶もせずに失礼いたしました」ということであわてて翌日「浮世絵 太田記念美術館」に馳せ参じました。

「浮世絵**猫百景**」2012年6月1日(金)～7月26日(木)と閉会間近ではありますが、ご興味のある方は総勢 2,321 匹の先輩方の活躍ぶりを、どうぞご覧下さい。

開館時間：10:30～17:30(入館は 17:00 まで) 月曜日休館。

入場料：一般 1,000 円、大高生 700 円、中学生以下無料

アクセス：JR 原宿駅下車「表参道口」から徒歩 5 分。

「表参道」通り左手にあるアルテカプラザ横を左に入ってすぐ。



- ◆この展覧会は江戸っ子・歌川国芳はじめ、その門下生が様々な猫たちを描いた展覧会です。歌川広重、歌川国利、歌川芳藤、小林幾英、小林清親、月岡芳年などの名前が見受けられます。歌川国芳は十数匹の猫を飼っていたようで、猫たちの特性や細かい動作が見事に描かれています。絵の枠外には版元名が印刷されているものもありますが、その所在地は日本橋と神田でした。ゴッホをはじめルノワール、モネ、セザンヌに影響を与えた日本の浮世絵。これらの版画は何回も版を重ねて色を出していきますが、それは日本の優れた職人技でした。
- ◆何匹もの猫を重ねて「たこ」などの文字に仕立ててある面白いアイデアの絵があります。また歌川広重の描いた浅草の町を眺める猫はどことなく風情があります。そのほかに家事をしながら猫の様子を気にかけている女性、猫を抱きしめて可愛がる女性などから、猫に対する愛情や当時流行した着物の柄などが見て取れます。
- ◆かつて猫は船の積み荷を鼠から守るため、船に乗せられて日本にやってきたわけですが、江戸時代には蚕を食べてしまう鼠退治に大活躍しました。いわば養蚕業の守り神的存在でした。
- ◆江戸時代の娯楽は主に歌舞伎で、このテーマの浮世絵が多数ありました。歌舞伎役者の浮世絵の中に猫が描かれていたり、その役者や江戸庶民の顔を猫にして描かれたものがあります。「百鬼怪談妖物雙六」の中には化け猫も登場します。また別の絵に鍋島の猫君もいました。飛び出す絵本的な紙の立体創作や紙の着せ替え人形、焼き物の人形もあります。将棋のようなマス目の中央に猫、四方ぐるりと鼠を配して、取った鼠の数を競うゲームもありました。
- ◆江戸時代にはすでに西洋文明が伝わっていて、慶應年間初期、猫が油絵のキャンバスに描かれた鶏に飛びついている絵がありました。この一点は他の物とは雰囲気違った西洋的浮世絵でした。
- ◆明治 10 年に猫の運動を描いた絵があり、その頃日本で行われていたスポーツが描いてあります。スポーツといえば鞠遊びの絵もあります。全身で鞠を転がしますが、蹴鞠はサッカーの原型でしょうか。
- ◆展示会場入口すぐ左手の浮世絵に描かれた女性の着物の藍色がすごく印象的でした。これは今でも藍染として人気の高い色です。絵の年代が進むにつれて色彩は赤と緑の組み合わせが多くなっていきます。この赤と緑は補色の関係にあり、この組み合わせは人々に「美しい」という印象を与えます。

猫をこよなく愛した天璋院様が愛猫のために詠えたあわび貝の形をした食器は、江戸市中に流行しました。明治生まれの吾輩も使ったこの食器も絵の中に描かれていて、食いしん坊の吾輩としてはとても嬉しくなりました。猫が江戸庶民にいかに愛されていたかがわかる楽しい展覧会でした。(2012.7.22 記)